

Finite Strip Method による扇形板の曲げ座屈

関西大学工学部 正会員 三上市 藏

〃 武田 八郎

〃 赤松 洋一

〃 米沢 博

1. まえがき 極異方性扇形板の曲げ座屈については、すでにFrobeniusの方法を用いて厳密解を誘導し¹⁾、さらにGalerkin法を用いて近似解を誘導した²⁾。厳密解によると係数行列式の値を0にするような座屈荷重を走直法によって数値計算しなければならず、計算時間を多く要する。Galerkin法によれば適当な項数を差し行列の固有値を求めればよく、計算時間の上では有利であるが、行列の性質が悪く桁落ちが顕著である。今回採用した解析法Finite Strip Methodは、一方向の境界条件を満足する連続函数を変位函数として用いるので、有限要素法に比べて行列の大きさが小さくなり、プログラミングが容易であり、また行列の性質が良い。扇形板の境界条件としては、直線辺が単純支持され、曲線辺が種々の支持条件をもつ場合について考察した。

2. 基本式の誘導および解析法 図-1に示すように、純曲げを受ける極異方性扇形板がいくつかの帶要素から構成され、各帶要素において剛度Dr, De, Drcは一定とする。図-1の斜線を施された任意の帶要素を考え、直線辺の境界条件を満足させるため、変位函数をつきのように表わす。

$$w = \sum_m \{ \zeta \}^t [C] \{ W \} \sin m\pi\theta/\alpha$$

ただし、 $\{ \zeta \} = \{ 1 \ \zeta \ \zeta^2 \ \zeta^3 \}^t$,

$$\{ W \} = \{ w_i \ \theta_i r_o \ w_o \ \theta_o r_o \}^t,$$

$$(C) = \frac{1}{(1-\rho)^3} \begin{pmatrix} 1-3\rho & -\rho(1-\rho) & \rho^2(3-\rho) & -\rho^2(1-\rho) \\ 6\rho & (1-\rho)(1+2\rho) & -6\rho & \rho(1-\rho)(2+\rho) \\ -3(1+\rho) & -(1-\rho)(2+\rho) & 3(1+\rho) & -(1-\rho)(1+2\rho) \\ 2 & 1-\rho & -2 & 1-\rho \end{pmatrix}$$

$$\zeta = r/r_o, \rho = r_i/r_o.$$

帶要素の曲率と曲げモーメント、ねじりモーメントは、それぞれつきのように表わされる。

$$\{ \chi \} = \{ -\partial^2 w / \partial r^2 - (\partial w / \partial r + \partial^2 w / \partial r^2 \theta^2) \ 2(\partial^2 w / \partial r \partial \theta - \partial w / \partial^2 \theta) \}^t = \sum_m 1/r_o^2 \cdot (T) [B] [C] \{ W \}$$

$$\{ M \} = \begin{pmatrix} M_r \\ M_\theta \\ M_{r\theta} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} Dr & Dr\nu_o & 0 \\ De\nu_r & De & 0 \\ 0 & 0 & Drc \end{pmatrix} \{ \chi \} = [D] \{ \chi \} = \sum_m 1/r_o^2 \cdot (D) (T) [B] [C] \{ W \}$$

ただし、(T)は $\phi\theta$ の三角函数、(B)は ϕ と ζ の函数を要素とする行列で、 $\phi = m\pi/\alpha$ で

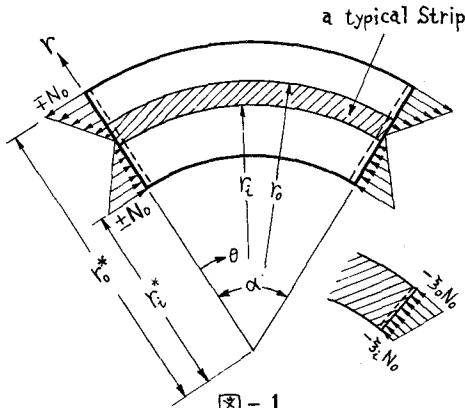


図-1

ある。

帶要素のポテンシャル・エネルギー U は、

$$U = \frac{1}{2} \int_0^{\alpha} \int_{\rho}^1 \left\{ \{M\}^t \{X\} - (\pm) \frac{N_0}{r_0^2 h^2} \left[\xi_i + \frac{(\xi_i - \xi_o)}{1-\rho} (1-\xi) \right] \left(\frac{\partial w}{\partial \theta} \right)^2 \right\} r_0^2 h d\xi d\theta$$

複号は、 $r = r_0$ で引張のとき十， $r = r_0$ で引張りのとき一となる。

上式を θ と ξ に関して積分するにつきのようになる。

$$U = \frac{D^* d \pi^2}{4(r_0^* - r_i^*)^2} \sum_m \{W\}^t \{C\}^t \left[\left(\frac{1-\rho}{\pi \beta} \right)^2 \delta(H) - k \phi^2(Y) \right] \{C\} \{W\} \quad (1)$$

ただし、 D^* は基準の曲げ剛さで、 $\delta = D_\theta / D^*$ ， $\beta = (r_0 - r_i) / (r_0^* - r_i^*)$ ，

$$N_0 = k D^* \pi^2 / (r_0^* - r_i^*)^2,$$

$$\begin{aligned} \{H\} &= \begin{cases} (D_\theta \phi^2 + 4Dr_\theta) \phi^2 (1-\rho^2) / 2\rho^2 & \text{symmetric} \\ D_\theta (\phi^2 - 1) \phi^2 (1-\rho) / \rho & -D_\theta (\phi^2 - 1)^2 \ln \rho \\ -(D_\theta (\phi^2 - 2) - 2D_1) & [D_\theta (\phi^2 - 2) - 2D_1] \quad [4Dr + D_\theta (\phi^2 - 2)^2 - 4D_1 (\phi^2 - 2) \\ -4Dr_\theta] \phi^2 \ln \rho & \cdot (\phi^2 - 1)(1-\rho) \quad +4Dr_\theta \phi^2] (1-\rho^2) / 2 \\ [D_\theta (\phi^2 - 3) - 6D_1] & [D_\theta (\phi^2 - 3) - 6D_1] \quad [12Dr + D_\theta (\phi^2 - 3)(\phi^2 - 2) \quad (36D_r + D_\theta (\phi^2 - 3)^2 - 12D_1 (\phi^2 - 3) \\ -8Dr_\theta] \phi^2 (1-\rho) & \cdot (\phi^2 - 1)(1-\rho^2) / 2 \quad -2D_1 (4\phi^2 - 9) + 8Dr_\theta \phi^2] (1-\rho^3) / 3 + 16Dr_\theta \phi^2 (1-\rho^4) / 4 \end{cases}, \\ \{Y\} &= \begin{cases} -Y_2 \ln \rho - Y_1 (1-\rho) & \text{symmetric} \\ Y_2 (1-\rho) - Y_1 (1-\rho^2) / 2 & Y_2 (1-\rho^2) / 2 - Y_1 (1-\rho^3) / 3 \\ Y_2 (1-\rho^2) / 2 - Y_1 (1-\rho^3) / 3 & Y_2 (1-\rho^3) / 3 - Y_1 (1-\rho^4) / 4 \quad Y_2 (1-\rho^4) / 4 - Y_1 (1-\rho^5) / 5 \\ Y_2 (1-\rho^3) / 3 - Y_1 (1-\rho^4) / 4 & Y_2 (1-\rho^4) / 4 - Y_1 (1-\rho^5) / 5 \quad Y_2 (1-\rho^5) / 5 - Y_1 (1-\rho^6) / 6 \quad Y_2 (1-\rho^6) / 6 - Y_1 (1-\rho^7) / 7 \end{cases}, \end{aligned}$$

$$Y_1 = (\xi_i - \xi_o) / (1-\rho) , \quad Y_2 = \xi_o + \xi_i , \quad D_1 \equiv Dr \nu_\theta = D_\theta \nu_r \text{ である。}$$

式(1)を $\{W\}$ に関して偏微分すると、つきのような式が得られる。

$$\frac{\partial U}{\partial W} = \{ \frac{\partial U}{\partial w_i} \quad \frac{\partial U}{\partial r_0 \theta_i} \quad \frac{\partial U}{\partial w_0} \quad \frac{\partial U}{\partial r_0 \theta_0} \}^t$$

$$\text{ここで} , \quad \frac{\partial U}{\partial w_i} = \frac{D^* d \pi^2}{2(r_0^* - r_i^*)^2} \sum_m (1000) \{C\}^t \left[\left(\frac{1-\rho}{\pi \beta} \right)^2 \delta(H) - k \phi^2(Y) \right] \{C\} \{W\} ,$$

$$\frac{\partial U}{\partial r_0 \theta_i} = \frac{D^* d \pi^2}{2(r_0^* - r_i^*)^2} \sum_m (0100) \{C\}^t \left[\left(\frac{1-\rho}{\pi \beta} \right)^2 \delta(H) - k \phi^2(Y) \right] \{C\} \{W\} , \quad \text{etc.}$$

したがって、行列を用いるにつきのように表わされる。

$$\frac{\partial U}{\partial W} = [(S) - k(F)] \{W\} \quad (2)$$

板全体の全ポテンシャル・エネルギーを最小にする方程式は、各帶要素に対する式(2)の $\{W\}$ の同一成分に対応する $[S]$, $[F]$ の各要素をそれぞれ加え合せ、それを板全体の大きさに集合することによって、つきのように得られる。

$$[(S^*) - k(F^*)] \{W\} = 0 \quad (3)$$

式(3)と曲線辺の境界条件を用いて最小固有値を求めれば、座屈荷重 N_0 が計算できる。数値計算例は、講演会当日發表する予定である。

1) 米沢三上・赤松：扇形板の曲げ座屈、土木学会関西支部年次学術講演会概要集、昭44.5, P.I-10

2) 米沢三上・武田・赤松：扇形板の曲げ座屈(近似解法)、土木学会年次学術講演会講演集第1部、昭44.9, PI-124